春色江戸紫

二編 中

国立国語研究所
30197
★図書館★

中村文庫

本兼

増補(ぞうほ)江戸紫(えどむらさき)二編中巻

江戸　朧月亭有人作

第九回

當下(そのとき)お牧(まき)ハお組(くみ)に向ひ　牧「お前(まへ)嫁(よめ)ぎのハ縁(ゑん)なれども良ハか惣次郎(そうじらう)ハ知ッての通(とほ)り親父(おとッさん)様が病身(びやうしん)だから萬事(ばんじ)惣次郎に任(まか)せたく思ふが姉妹(きやうだい)の順女に首丈大違究を明(あか)さ気ども　あきぬ中でも親子(おやこ)ハく藤になり日向あり親父(おとッさん)様のお前(まへ)ら人に及ぼさ、親類衆(しんるゐしゆ)のおも

深くろッてハ、密されど悪事(あくど)千里(り)を走(えし)るのたとへ
終(つい)に上方の本家(ほんけ)へ聞えて損(そん)を不承(ふしよう)存(ぞん)命(め)[illegible]運(うん)
当も世話にハ、乗とらぬハ第(ざう)一(ち)善兵衛(ぜんべゑ)の心得違(こゝろえちがひ)ト本家(ほんけ)
の身持(ぜんご)も以(もつて)の外の御立腹(りつぷく)で江戸御名代(えどごめうだい)として当座御免(とうざごめん)
さるが江下りめでたく運蔵(うんざう)にまかせさのめく今(いまゝで)まで
何不自由(なにふじゆう)なく居(た)させのが職(えいり)に運蔵(うんざう)されてこそ宜べし
悪(あく)ッく居所(ゐどころ)にも困(こまら)うと一入(ひとしほ)若後も不便(ふびん)にあらぬ
除く抱(ざんく)安(ゆうき)せさへ此方(きう)のかめひむとへ大(ここ)遠(あれまづ)ひその

お楽(らく)といふ唄女(げいしや)の宅(うち)に亭主気(ていしゆき)どりで居(ゐ)るとの事(こと)
夫(それ)につく和合(わがう)がよくッて結句(けつく)運上(うんじやう)うけさのが揚(まり)ごと
いふ気(き)で居(ゐ)るさうサ 妹(いもと)にお前(まへ)の事(こと)なんぞも糞(くそ)に
せうにこうく云(い)ッてる 振子(せうたい)サ宅(うち)に居(ゐ)りやア まうさなへ に
親(おや)なる女房(にようぼう)も持(もつ)けりやア なうまへが秘(わく)して運上(うんじやう)に
まッさくなりやア 其損(そん)替苦労(くらう)もねへなんぞと云(い)ッてる
さうざう 宮(さぎ)めーお気(まへ)も添(そひ)さう 懲(こり)も添(そへ)て やり
ていが 何をいふにも 我仏(えんじん)の男(をとこ)の気(き)が若(わか)ッて居(ゐ)て こまりやア

力(ちから)づくにも髪をむしれ好著ト云ッて幼が附ら
書女(きうぢよ)に貰(もら)ッさかお前(まへ)をば室町(むろまち)へ返しとつてやア由
れお貞(さだ)さん先妻(せんさい)の娘(むすめ)でうる宅(うち)へおへこか夫婦が押(おせ)へ
う是で出しとう返しとうとう人の口にや戸(と)が建(たて)られ
ぬ第一亡失さお貞(さだ)さんにも海へうらそこで家徳の
おかみさんやア善次郎(ぜんじらう)とお前(まへ)と婚(め)あはせあの身代(しんだい)御縁
譲(ゆづ)ッたら草葉(くさば)の陰(かげ)でお貞(さだ)さんも嘸(さぞ)お喜(よろこ)びなさらう
費(つい)ちやア室町(むろまち)の方へ惣次郎(そうじらう)が利走違(よろづ)さ金子(きんす)も

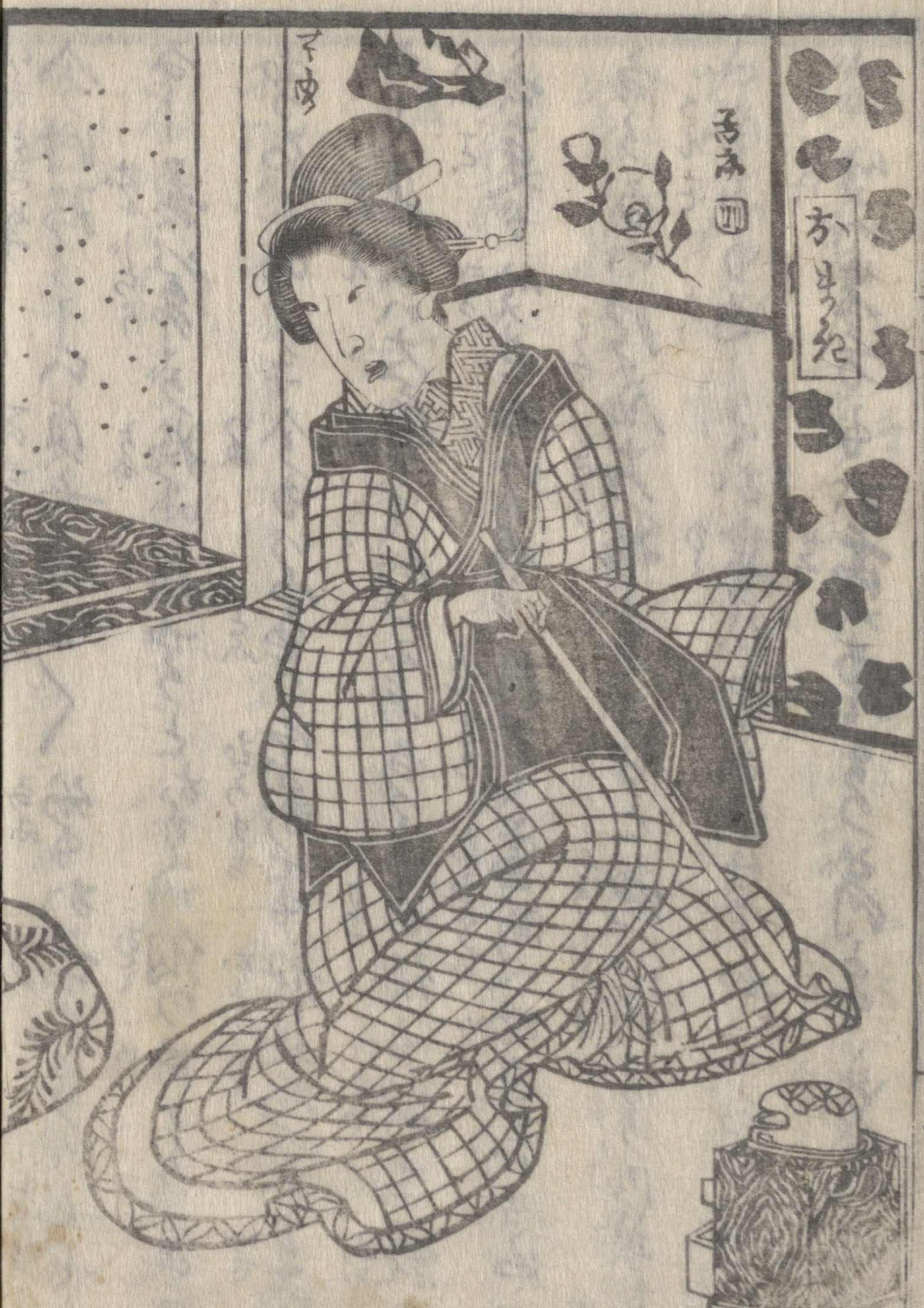
些(ちつと)ハあるきうぞう表紙(へうし)今(いま)と云ッさ処(ところ)が失礼(しつれい)なぞう宿町(あをもろ)でも急(きふ)な事を気の利(き)いた様(とみ)なやア好(やく)きまへらう彼方(あつち)を此方(こつち)を勉強(りんべん)しく否(いや)でもあらうがウンと云ッてく是(ぜん)次郎(じらう)と喜撰(きろづき)しくお呈(てい)する（かくさへのあともいやだからもでゞある）牧「辺国(へんど)のなへのハ否(いや)だとお云(いひ)のう「イヱ否(いや)とハ申(まう)ませんけれども

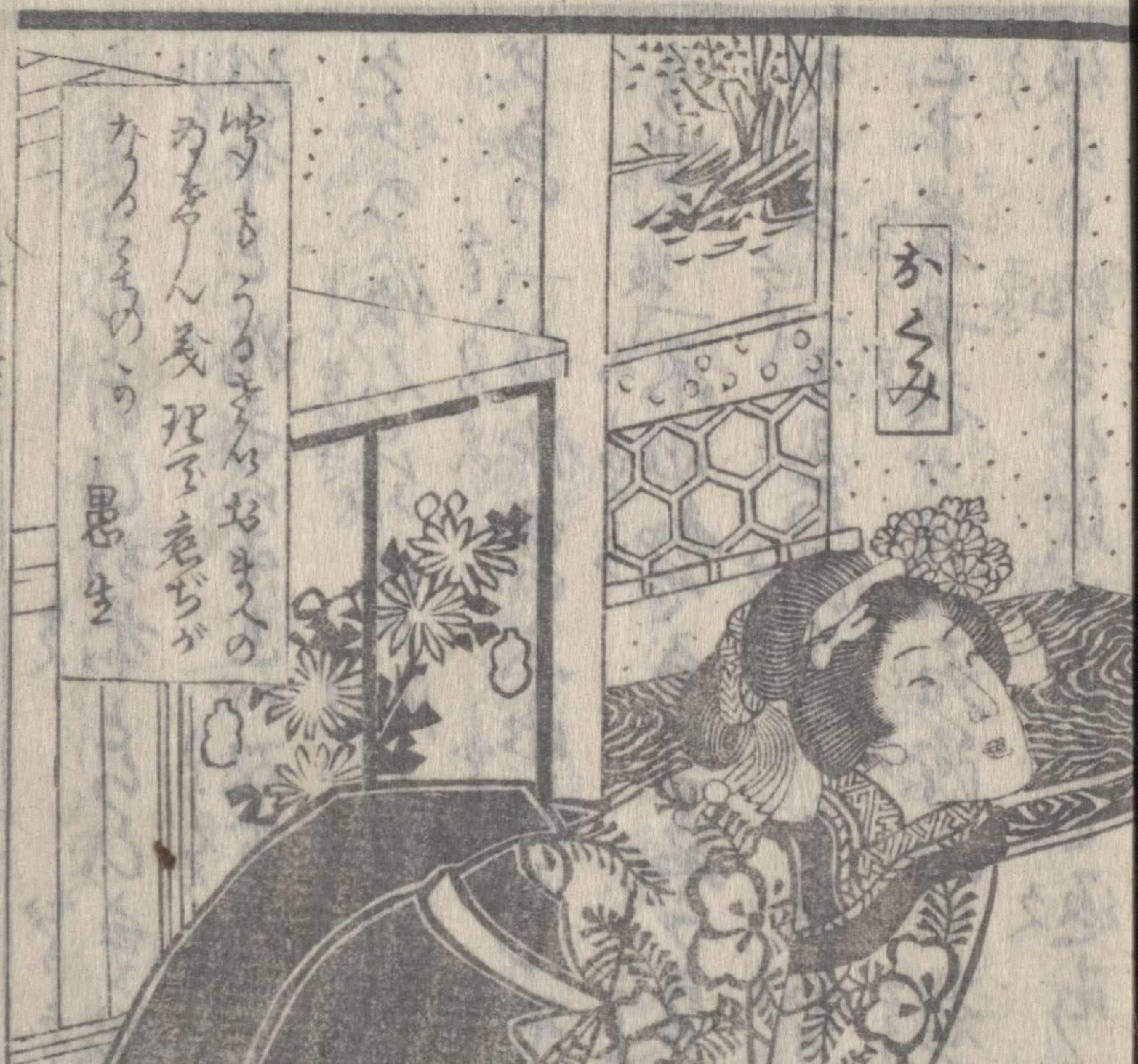
牧「否(いや)でなきやア返事(へんど)をお致(いた)し。コレサ喜縁(うえし)ふなろうに気を利(き)かせぐゝ様(ざま)云て居(ゐ)ちやアコヲちうなへや子。ヲイ。ヱイ。チヨツ忠(ぐ)ッとへどやアなへら否とか応(おう)とかお云(いひ)なお縁(なぎ)涙の

彦様まず「中々めつそう勿体ない居所じやァありませんなれども親父や姉が申ますには其方の丈ハ惣次郎様より他にかへるゐへへ年とらひながら宮参りの世の習ひ悲しき事ものゝ事でも為べき尼となつて亡親の弔へヨとの御教訓の一存ふ御返答がありかねまするとヨ

牧「夫じやァ何ぞ父上さんやお絹さんが男ハ一生に一人のものだからモシ惣次郎が死でも来るから尼にでもなれとお云ふのが子てえくい

今時（いまどき）珍（めづ）らしい貞女（ていぢよ）感心（かんしん）〳〵御身（おみ）もお前（まへ）だらうが女（をんな）でも
なし善次郎（ぜんじらう）が嫁（よめ）に彼女（し）とおふくが網（あみ）の目（め）からいの
出るほどおまへが子今もら呼（よぶ）室町（むろまち）でも親父（おとッつえ）様にあなたではい
なし兄上（あにさん）は大病（びやうき）中からそれなれば後（こうし）も親（おや）きぬ親（おや）の
云事（いふこと）が嬉（きう）しなけりやア據（よんどころ）なく室町（むろまち）へ帰（く）さるるきやア
ならぬ理屈（こうけ）右（さう）様にしてみると悪（ぞう）次郎（じらう）が頭（ず）つ上（ぞ）
さ今年（さんき）も遂（く）しくもお夢（ゆめ）ひやきなけりやア先（なさ）へ行（つ）
ざが嬉（きう）だが兄方も此節（せつ）は先まつ嬉（ぞ）とも〳〵


おまつえ


咲まうるきんにおまへの
みさをん義理を意ぢが
なりそめの この
愚生
おくみ

お貞さんといひお菊といひ重縁の変でハあり。善次郎と嫁御へ書置が双方丸く納まらうと思ふこゝろの信切気ずくが肝心のお菊が不承知なら是非がなへ「身許なへ不承知なんぞと申わけでハござへませぬ故「不承知でなけりやア名縁のいふ事ウントお[illegible]「それハ只今申ませう[illegible]の[illegible]と申義理掛がお貞[illegible]にも惣次郎を大切にさく後にも[illegible]出来ませぬと返す[illegible]

ざうも
牧「よくお前(まへ)ハ慈母(おッかゝ)さん〳〵とお貞(さだ)さんだらう大(だい)切(せつ)ふ思(おも)つくおまへが夫(それ)もその笑(ゑみ)お貞(さだ)さんハ念(ねん)じうの御(ご)内(しん)室(ぞ)各(つまし)後アア下女(げぢよ)らうなるあづらの浮(お)きまゝ雇(やとひ)同(どう)様(やう)ふ(そ)分(ぶん)ざうる(ぞう)康(?)みゝるのもなサト思(おもひ)(やや)みかうんざ當(まそ)てまう聞(きく)ざふつらくおの人どゝ親(おや)と名(な)のつかみゝさふ金(きん)と返(へん)回(くわい)てゝさえ泣(なく)よう外(そと)のことぞなる
牧「サアお前(まへ)お気(き)が板(いた)振(ふり)てまう留(とめ)（きうまん）なくモウ外(そと)み聞(きく)こともなく給(けん)とば親(おや)の目(め)振(ぶり)みゝも

申上（まうしあげ）てお絹様（きぬさん）でも呼（よび）にあげてとツくりお相談（さうだん）しませう
別（あつち）る人は継（まゝ）やト其身（そのみ）もその義（ぎ）立（たち）なれバお継（まゝ）
も今更（いまさら）手持（てもち）なく獨（ひとり）ふにおめ〳〵若（わか）もや婦（まゝ）継
呼（よび）し上令の長（ちやう）我身の上相続（さうぞく）なし其上（そのうへ）附
に気（き）強（つよ）く気（き）に引（ひ）ざりまべよし。さも気（き）の元（もと）はら標も
ゑきさん人親（おや）の亡（なき）後（のち）は婦（まゝ）は親（おや）なれバ継（まゝ）
まで悄（しを）くも飛（と）つ〳〵見（み）やせん角（かく）と極（ごく）に案（あん）ド
るまじきものなるべし○夫（それ）よりお牧（まき）は善次郎（ぜんじらう）が部屋（へや）

みゝありおゝくの御せざるよう紙かゝりて稀例と
ひとども善道弟の中くゐおめひ勝べき景色にも
あくモシヤお組と添ましべ死にも為ならぬ為
なれバ縁智にしけしお牧なづる子敬の言に
ら勢まどひ待たが是より室町へまり金をば置に
お絹紙残し徒生ぞくぬにまゝせなんと是より家
町なるおゝゑが実家発足く帰のお絹に對
面なし　牧「扨今日私の参ッさの人能のゆでも

ござりませんが宗十郎(そうじうらう)は京都(きやうと)の本家(ほんけ)より勘当(かんだう)
まちゆうみとの御沙汰(ごさた)よつて昨日(きのふ)勘当赦(かんだうゆるし)まして
是(これ)に就(つい)て御親類(ごしんるゐ)様のよろこびで御立合(おたちあひ)も願(ねが)ふ所(ところ)
ど与次兵衛様(よじべゑさま)は御大病気(ごたいびやうき)全快でお前(まへ)さんも御年寄(としより)と
御察(さつ)し申てお招(まね)き申ませねば委細(いさい)は今朝(けさ)絵図(ゑど)致
でかて上(あづ)ましく言(ゑ)善十郎(ぜんドらう)はともあれ宗十郎(そうドらう)へ
義理(ぎり)ある倅(せがれ)善之人(ぜん)にも様(わろ)く致(いた)き為(ため)上方(かみがた)の御名代(ごみやうだい)
當在一ツ度(とうざいなりんどの)にも此(この)勢ましてよ此(この)度(ど)みなりてへ蛍桃(ぜん)が寛へ

其繁り商人の幸艶を見倹と江戸呉服も我て

専りとたのもしいか絹紗せめても楽しみ御推量

絣下ましト縞つ二ぶまで潤お編もうるむ目気など

緞繻の袖なとおしぬぐひ「今朝続のおみを拝

見殺しまして手の物縷さ拝まま京よ覚さら

つ[illegible]しまして[illegible]郎様のお伽話も[illegible]い妹ら

純ツきるの縫物度も変との縞染るとあらくめく

成程の御挽留で御分限様べのもおきへらる

此家そのまゝとらせね妹御同うけつぎまして下されましへ是とても義理ある中、なんのよろく思ひまする今日まぶく祭りさもお継のしよふ続きましくチトお娵もいゝたし京都の大変もありト中へ継母でもござりません惣次郎が家出いたしたればお継此方へ帰りしやすさもろくへ書置残しておけ様は御同と思ふが習ならば又善兵衛が中へますとまへ。お継へ参てお貞のの校恋の惣次郎が居らねとて室町人通しくれ云ご

さも貞へ自色が海ぬトいふて絶うり書をとまつよの居
次郎が家内ふ居るこそ幸ひ殊ふハ紅あかりハ是非
善へふげ早くゆと別の年寄の気短ふ中へ逃入さ
右悔の是悲ぶ悔ぶ居だろうハ親の威光でふも切るる
男気善次郎の猶も笑されバ両親の其名遺骨ハ京ハ
とあ文をとでラノあふ笑されバあのくあのト猶預み悲
次郎へ共中生そもも多理ふ是ハねど約俄ふ急ふもまぎ
子供衣類周くみ涼しとゆう月を経るまでみ悪次郎が

事も意見て纔な事ある節ぞらやうすほど
見ると惣領から折角づ道楽する金もあれど
つなぐる縁の中なれば今迄と出でハ子なれど。是も
あの見るあまり貴君ハ婦の役なれバアノ子の納得も
せうに欲心受せく来と同意に云それハお縁ハ今の
ことなど銭あとにうんで性生づく、めにお金を受なの
若旦那にあへま早男と書うさに「丈ハくのる
方あれ伍絵切集人でも奇濃お同にかくりお乳も中なず

されども此様ドの悪りの大病、世間におゝき云ふ、云号の悪五郎
さる悪人を除くと申所に男を持ちながら子と婦を
親父の心にも背き老衰なさる父母の仰せを用ひませぬは
不孝なる婦の心をも揉ませ善五郎様に悪人と云
ぜつマア私らまでも今度の事の悪五郎様より
おのれ、殺して一旦に報恩ござりませぬ。悪人より返報致さう
とんだ心得違ひ居るものの、彼やと気分立つ悪口ならうの
大臣の善を損ね人の悪五郎様人の悦び様よろしく

以畜生(ちくしやう)ねがひおまゐるト案(あん)じよお主のお絹(きぬ)が過(とが)ようら
の縁(つな)も切(きれ)果(はて)くつ段(ゑゝら)年ーさ由限(くどく)多く言わて返(く)ま過(とがも)ろく。
恐(ゝゝゝ)けらなくそゝしく不我家(わがや)紙さしく慢(く)りゐる
是(これ)より甚次郎(じんどらう)にあひしるすが由揚語(あげぐう)。せん術(まづつき)乏て
おゝら実家(むろまち)町へ久せしかど。そくお悲ゆるさなく残(り)る
今(かん)の日(ひ)を經(まし)よえろ。ハお姻(ゑ)が蒔見(みめ)面貝(ぐう)まで御(いきさつ)ハ
添おゝ皇ど。○其身(そのみ)弁生れ当全(おき)しとまん

第十回

咲花（さくはな）も落月は風が雑高卜杜支がきざみてもまあおなうか絹（きぬ）かゝへ井（ちう）らぎも由兵衛（よしべゑ）が長の病氣（びやうき）も強（つよ）よ養生（やうじやう）殿（との）へ出で悔（く）らぬ門途（かどで）とするものゝ歎（なげき）をもつく林とし洞状かのごとく池（いけ）といへる今魚（うを）の鰭状ひ空飛鳥（そらとぶとり）の翼（つばさ）よりまさる極（さゑ）もしがかくてあるべき変（へん）ならねば形（かたち）のごく野送（のおく）りなしきぶく二七日もめぐるに久松町（ひさまつちやう）なる千太郎（せんとらう）、彼よりの分（ぶん）の金子の催促（さいそく）の日（ひ）よ増（まし）加（かさ）なればつけ云分解（いひわけ）せんも口惜（くちをし）とて家内（うらい）の縁者（えんじや）みへ世（ちと）

俗(ぞく)に女(め)紙あそく雛(ひゝな)をまつる中にもお内と呼(よび)ぶく

女子の手業を多(おほ)くも織(き)ねど。また衣裳(ころぞく)さへかく細(しく)絹(きぬ)が久枉

町(てう)に来(あつ)しひよう衣(ころ)例(そぞちう)く従(つ)しが今室町(むろまち)人(え)形(いぞう)にまさく

至身も本ふ雛(ひゝな)をとゞめく新(ろく)近知ふに在(あ)るが今(いま)まさ

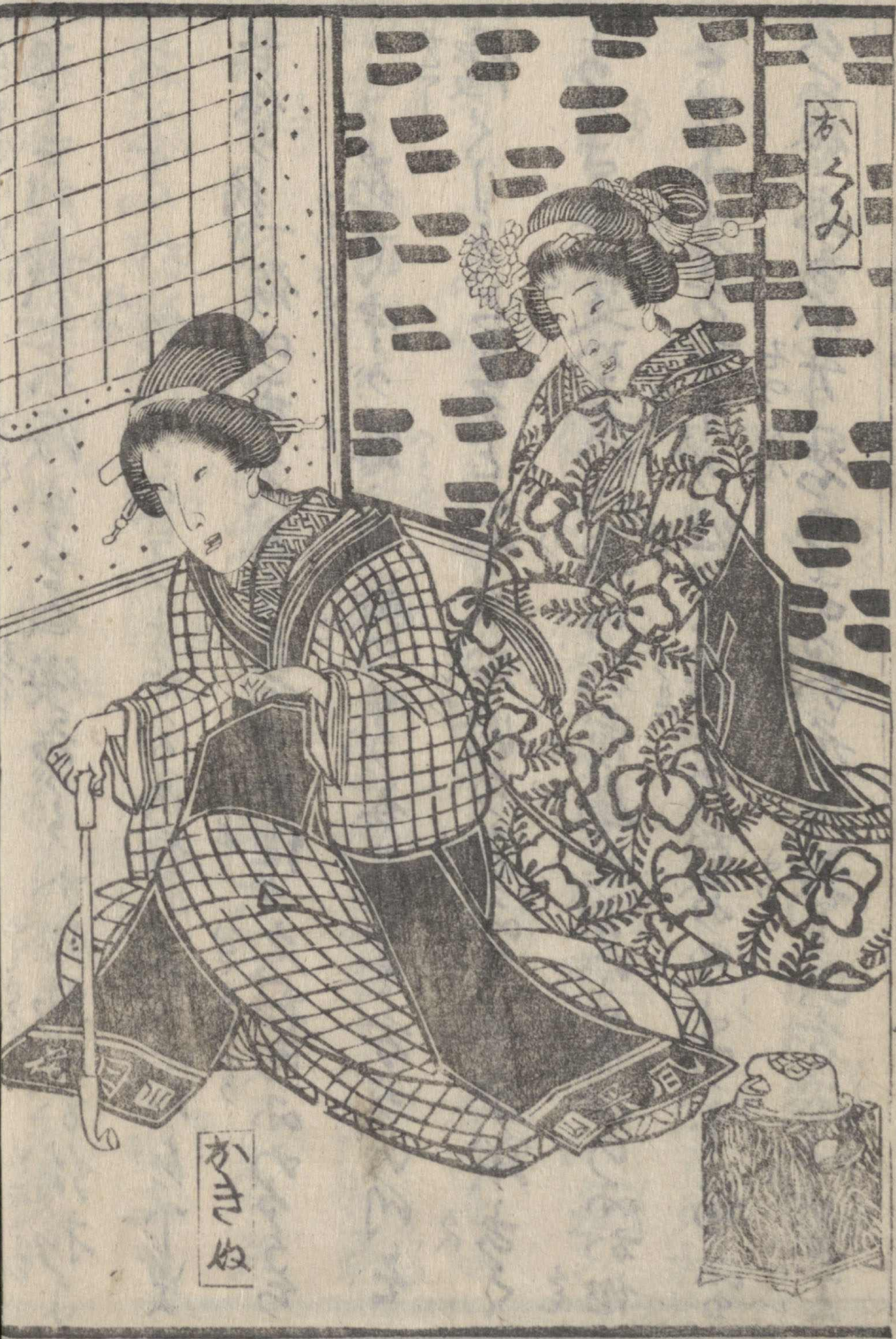
姫者(おうしや)よ王しく雛(ひゝな)をと(と)ろまる世(とき)のをゝて渡(いろの)かざ(える)

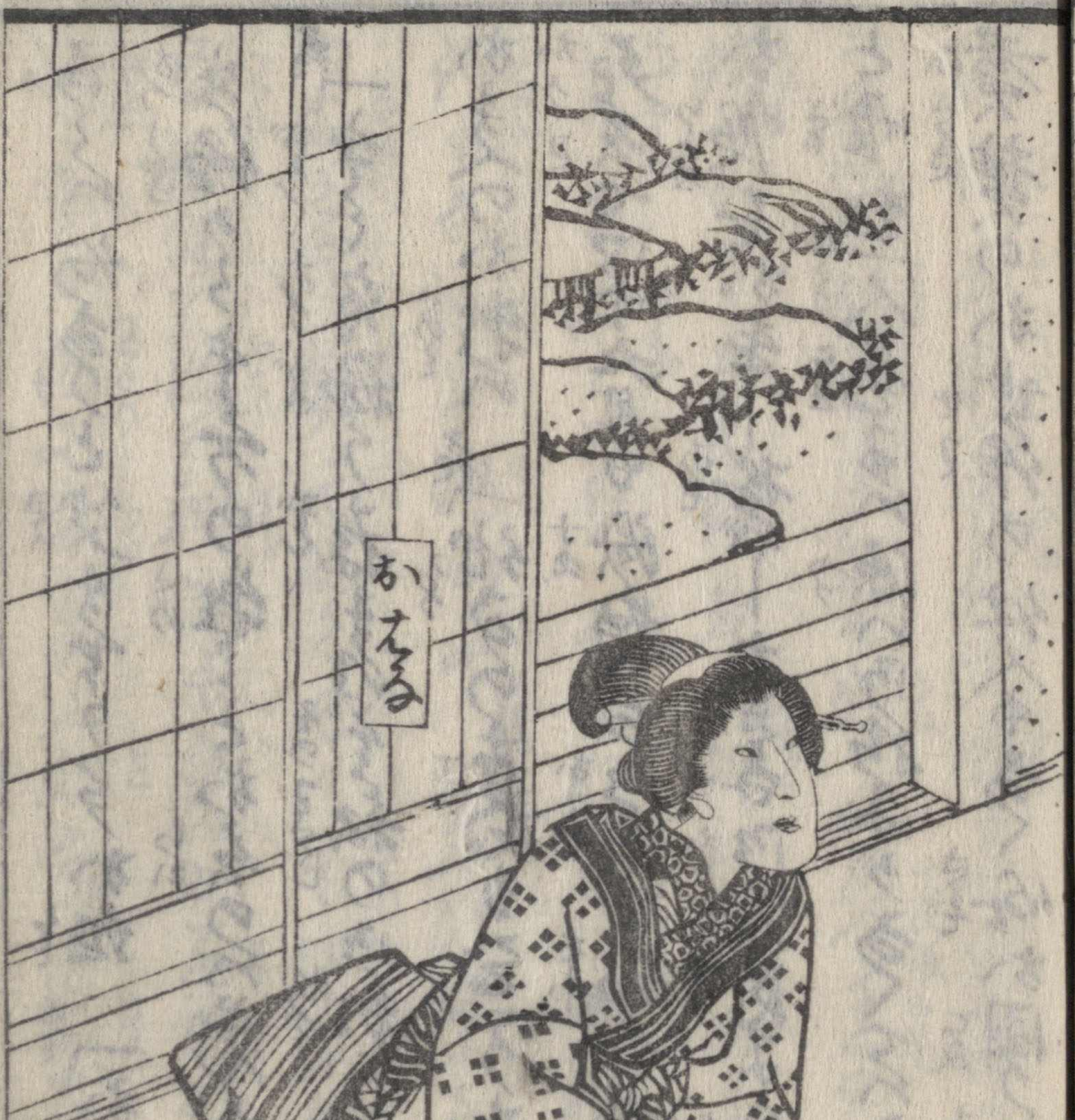
ふふ色(しろ)つぶくかづけ物(めめ)など多(あれ)くある身のかゝる服

まるも(とく)の本ふ衣(える)る万(りやう)眼(がん)よ洞(ほこぞ)紙らぐ衣「給のおく服(ふく)にも

三ま世も衣(つきくし)備ふ此(せう)紙よ結構(ころうろ)多から物(めめ)男る天宮(おつむり)の

抱主は戴て海より深き恩なれバ御父様や御母様ニ
お今く御願ひがござりますが御聞済し[illegible]下さ
其許の為「御身の用ふへ言ふ事ハお絹が久松殿にかゝりまち
うち家内中が皆存じる他所の女子ではどうがいかを
後くしくくるとらく御附の者にもその銭出く
よくきね是へ奥の御肴尾もよへきうぞのに御絹
と申に出方を伺り仕ッて呉との御方のこの御為
らるゝ其方へ其恐のある御前の数を行きに叶ひさま


おくみ
おきぬ


おえゐ

なくべつありと笑ませうタお話「お婦さんがアノ様よ仰しやります方の数ことおふるのぜんまでとう〳〵夜や

糸「重々有難う存じます私の御願ひハ

緒「さうしてくお主人のお歎ハ

糸「尤もの事でもございませぬが是非様が死去で四十九日も済ぬうち御後家を初め女中衆まで皆ンなお暇をお出し遊ばし大きな御家内も今夜からお継様と唯お二人是までハ御様子がよくしれハせぬ事なれど夫婦のお世話の仕人も多く嘸お園様が遊せう事

てハ何卒私を御殺しなされませとぞうらみあのうお継
き母にお別れ申すが心も悲しの今生の暇乞人まで御引
情てくらしますも何卒此経を御用ひますお徒成く
ふざけ作と涙と共に包まれば御絹も涙せきあへざりし
涙も会りしが漸ありて「年頃給ふ年玉人さへ乱喰
の仰しへ勇んで出てゆく其中にお継母も御身
台縁ゆへ深の別深もさへおまへのお弱き縁先とも
憐しへとも渡に身との如なげき悲しの余り是非

甚六(じんろく)のやうに言(い)はれ是程(これほど)理屈(りくつ)屋がみえる　まつ若「その理屈と仰(おつしや)る

のも大方(おほかた)はお察(さつ)し申して居(をり)ますら都(と)を居れば御恩(ごおん)

三世(さんぜ)の御恩(ごおん)の御主人(ごしゆじん)はぞんじますがどんな変があらうとも他人(たにん)に

あらまし気(き)づまりもなし唯今(たゞいま)も申ます通(とほ)りお人減

に成(なり)ましても今まで女中(ぢよちう)衆の暮(くら)しよりは私一人(わたくしひとり)で

暮(くら)しますから何卒(どうぞ)お供(とも)なされて下さりまし　婦「変(かは)らぬ

おと云のもく居て貴(たふと)ふ其(その)めでも言(いふ)のが言(いは)れぬ理屈と

いつハまだ婦も娘(むすめ)お貞(てい)がそろしや一生(いつしやう)の母(はゝ)悲(かな)しみ身(み)よりまりくへ

都合のよいは節句まへ盆は茶屋方仕切帳が済
らねへそれ宗金掛ひの所も来べ丸で済らぬ所もあり
せつぱつまつてが借中さか金子の入るも今の十両余
又十両と参も様つゞく六百匹さま来ても由云勝が二七
月も海ならちらる矢の催促よるき人口やかましく
武家屋敷から継代呂絶間なし奥支配を蒙ぶ松つ
て金子整ひアノ善十郎の様子おつけて申まする
所で女房も重もお海の親父の継吾十郎さんの云ふと

近く女房は皆までも一番すきなお牧さんも喜んで

お金子のことも幸郷やるまいかお紙かあんべ死ンだら

まし嬉しからうがお顔にもお出し嬉しねお優しさ

どうぞ治るやうに揉ませとのおお揃へさ〜〜〜〜ト笑ふ

語「ホン二此ことと言ふ事がお前の事は誰わらぬ男ぶり

なら気立なからぬでもよろしね無卵とらぬ金箔の

附と男のある身で長淵文斎の音羽卵の女房に

まあよくある話播摘る入まい程の事結構お牧や

善[illegible]の[illegible]ツし[illegible]ら[illegible]。十二
[illegible]まうノウ お花そんなものでいら[illegible]まするが「[illegible]く
[illegible]世の[illegible]ひと浄土宗の法談に[illegible]
ましまして天竺には七[illegible]長者といふ中ましまして
[illegible]く八[illegible]にも[illegible]よう立派な長者に
あつさら中またまたよし[illegible]しんぱいさつをお引取[illegible]
で[illegible]まま[illegible]さうともそのうち[illegible]の
[illegible]家である[illegible]まして[illegible]よくは[illegible]も[illegible]の世[illegible]

「よし旦那の浄土家が志ましホがアノ出家男ふ引く人ハ浄家と丈帰ホ多川く和合善して居るら。とでも思って余所他で浄肉家でもお特多く浄待中と甲斐もなし今の丈が若男ざんトなく又きかば　「お経無誠若男として見立べ止度もなのあぐそれど。それな不実者な人でもあるまい実子の義浄家不家祭を済る浄仏心の人ならぬも多への身持教為抑浄養のお楽と申ても仏経の見ごく御多ひの多くき出銭しさ

の御繁昌(はんじやう)はどこへも行(ゆき)きにお楽(らく)の宅(うち)に居(ゐ)なされば
まうそうへえずト言義(らみ)おなかが引(ひき)とるて「玉(きん)将(わくきんさう)よう指(さし)嬉(ゑみ)に
まるにみ居(おら)ぞうういつも春(くらう)労でありません「多(まぜ)（糸(いと)）「金
お数(まさよし)揃をそじめ咲(さきまで)とが随(ずいぶん)にこそとやましく（糸）「支が
先方(さき)の箏弁(てごと)とへめの音(こく)曲も支がへりざうう
よくよく拍子(ひやうし)を笑(きら)せるやうに後(そのご)はかくしも嘉(おくさま)祝(さき)察(お楽)
ト申(まう)も惣(そうさん)組の行末(ゆくく)がしまねで大(おほ)寿(かざぎ)ぎとたしうに
笑て大(おほ)きに安堵(あんど)致(いた)しめと神仏(かみほとけ)の御利益(ごりやく)より沈(ろう)は

なハト言ツておはなに打向ひ　錯「私ゆゑ世帯も既のばかりに
居くお具なる支に増さことなるの是から雑銭を貴払
今まで人を遁せぬ悪事よくよし　若「ホンニ左様でどうぞこのまゝ
是よりハ二人お手數銭を代しく　若は家方へ来ゆ
なひ救代居別し　室町も人の極をなりにして養と
いふものありけるなり

増補（ぞうほ）江戸紫（えどむらさき）二編中之巻終

30197

国立国語研究所
1001951381

9
66
2